

発行所  
天理教笠岡大教会

かさおか編集掛  
笠岡市用之江377  
郵便番号714-0066  
(0865)  
電話 66-1311

# かさおか



**教祖120年祭を目指し、  
道の後継者の育成を念頭に邁進しよう。**

# 年頭公議「あいきり」

明けましておめでとうござります。

昨年は、十一月二十九日に創立百十周年記念祭を賑やかに滞りなくつとめ、お入り込みくださった真柱様御夫妻・随員の先生方にお喜びいただけた素晴らしい記念祭でした。それに向けての皆様方の真実の賜物と御礼を申し上げます。ありがとうございました。とございまして。とござい、今年も変わらせず、心一つに揃えておつとめいただきますようお願ひ申し上げます。

## 教祖百二十年祭に向け

### ”道の後継者の育成“

年頭に当たり、今年一年の心の向き・置き所について相談したいと思いますが、記念祭のときに、真柱様から「記念祭をつとめるといふことは、それを吉祥として教会設立のときの初代の思いに立ち返り、新たな歩み出しをするのが大切で、そのときの初代の思いとは、御恩報じ、であり、末代の理に許された教会である」といふようなおことばを頂戴しました。

この三年千日、にをいがけを通して、何でもございでも御恩報じさせていたただきたいという初代の思いに立ち返るべく歩んできましたが、末代の理と

いつ思いにまでは至っていませんでしたので、今年からの歩みについては、それを主眼にして歩みたいと思いが、真柱様が、年頭の「あいきり」で「教祖百二十年祭をつとめたい」と仰いましたので、記念祭を終えるの笠罫の次の節目は百二十年祭になりましょうから、今年一年だけということではなく、百二十年祭に向けて、道の後継者の育成、といふことを申し合わせたいと思えます。

### ”においがけ“と

### ”道の後継者の育成“

さて、昨年は、米国同時多発テロ事件に始まり、いろいろと心を荒ませる事柄の多い年ではありましたが、その中で、私たちは、にをいがけを通して心に喜びを与えていただきました。この三年千日、せうかく歩くことよって喜びを与えていただきましたので、これからも、百万軒にをいがけ、というような打ち出しはしませんけれども、それぞれの教会で心定めをしていただいて、にをいがけ、ということが続けてほしいと思えます。

記念祭における真柱様のおことばの、御恩報じ、と末代の理、とこの二つの角目から記念祭後の歩み直しを思案して、御恩報じ、の二つの方法として、にをいがけ、を、また、末

代の理、とこの二つから、道の後継者の育成、を、この二つを心に置いて、今年一年なり、また百二十年祭に向かっの歩みにしていただきますようお願ひ申し上げます。

## 部内巡教について

話しは変わりますが、部内巡教について、「二・三月は寒くもあり、なかなか思うようにいかないで、暖かくなつてからの方が受け入れやすい」といふような話が聞かれます。

「せうかくだから、少しでも多くの人に集まってもらいたい」とか、「年に一回だから少しでもいい接待をしたい」とか、それぞれ思いがあるのも分かります。

それは大変ありがたいのですが、二・三月に行なうわけは、年頭会議で申し合わせる今年一年の角目を、一日も早く部内先々にまで流したいからです。

「年頭会議には、教会長も布教所長も出て、その人たちが流すのだから、二・三月でなくても、五・六月でいい」といふ方もおられますが、部内を回りますと、教会の役員さんや信者さん

から「うちの会長さんは、上級・大教会・おちば」と、いろいろ話しを聞かれていますのに、私共はどういう話だったのか一つも聞かせてもらえない」といふ方も少なからずおられます。



## 立教165年 教会長講習会

日時 3月26日 午後1時30分 受付、2時 開講

3月27日 正午 閉講

場所 笠岡詰所

講師 本部員・櫻井大教会長 富松幹禎 先生

本部講演部講師・越美分教会長 筒井敬一 先生

内容 大教会長様挨拶、講話①(筒井敬一先生)、  
講話②(富松幹禎先生)、ねりあい(約4時間)

対象 教会長

受講御供 3,000円(受付で頂きます)

会長さんの思いがあつてそうされているところもありまいしょうから、それが悪いとは思いませんが、大教会としては、笠岡に繋がるよふぼく・信者、一人ひとりが、一手二つになるために、部内先々のよふぼく・信者の端々にまで、思いだけは流し切りしたいということと、二・三月に行なっている次第です。

まず、「受ける」という思いが第一で、「少しでもいい状態で」とか「少しでもいい接待を」と思うのは第二・第三の思いだろうと思いますので、順序を考えていただいて、先ず第一に受ける気持を持つてつめていただきたいと思います。

人数が多いに越したことはなく、その努力はしていただきたいとは思いますが、人数云々とか立派なごちそうとかいうことではなく、先ず理を受けることの方が大切だと思いを持って、二・三月に受けていただきたいと思います。

「それなら、二月に全部受けさせてもらいたい」というところもありますが、何分にも巡教員の数に限られておりますので、二・三月に分けておりますから、その点も「了承い

ただいて、「本当は二月の方がよかつたのに」という中も、三月に受けていただきたいと思います。その点も心に置いて、今年一年、心を一つに合わせてつとめましよう。

記念祭までの一手二つの思いを今年も持ち続けておつとめいただきますようお願いを申し上げます。今日、今日の新年の挨拶とさせていただきます。

### 心定めについて

なお、本年の大教会のおぢばへの心定めは、「初席者三〇〇名、おさづけの理拝載者二〇〇名、修養科修了者一五〇名、教人登録一五〇名」とさせていただきます。

「一教会最低一名」を御守護いただくための動きをした」という思いですが、決して、数にこだわることではありません。私は、数に向けての動きにこだわりたいのです。

数は御守護いただかないかも知れないけれども、「初席者なら最低でも二名、よふぼくなら一人できたらもう一人、修養科生や教人も一人は」何とか御守護いただきたい、そういう動きをしたい。これに向けての実動を、今日、お互いに心定めして、歩みたいと思います。

成つても成らないでも動く、それが諭達の精神です。とにかく、共に、「何でも、どうでも」という思いで、今年一年、精一杯に動きましよう。

# 春季大祭講話

ただいまは、春の大祭、理のお許しを戴いての本年最初のおつとめをとめました。年頭に当たつての心定めをするのも、その意義だらうと思ひますので、今年一年の心の角目について、思うところをお話したいと思ひます。

## 与えていただいた喜び心

この三年千日、百万軒にをいがけを基本に、皆さん心を一つにして歩きました。三年間通る中に、何かしら心に喜びを与えていただけました。記念祭の日だけではなく、それまでの一年間通つて喜びを与えていただいたと、私は思ひます。記念祭に向けての三年千日の歩みがあったからこそ、一年間の喜びが、また、記念祭の大きな喜びがあったと思つたのです。喜びはいつかいつかめでたが、私は、百十周年の歩みの大きな御守護の姿だつたらうと思ひます。

正直申つて、「をいがけ」は、いつかいつかからではな、三年、四年と歩けば、いつかいつか思ひます。でもな、歩むことによつて、たわけですが、その中にも、「歩むことによつて、いつかいつか、はなはな、いつかいつか、何かしら喜



びがあった」といつかいつかを感じたのは、私一人だけではなかつたと思つたのです。大勢の方がそういう喜びの心を持ってたのは、やはり、実動したからこそであり、その実動自体が大きな御守護の姿だつたらうと思つたのです。

去年の世上の姿をきえてみてください。やれ狂牛病やら、同時多発テロを発端とした戦争行為、炭疽菌の問題、大きな事件・事故、心が痛むような暗くなるようなことばかりでした。政治の行く先も経済の解決の糸口も見えず、愛子内親王御誕生の外は心が見るくような材料がない世上の姿でした。

そうした中で、この笠岡に繋がるお互ひは、一年間、喜びを味わつてきたといふことは、大変すばらしい御守護だつたと思ひます。

結婚式やめでたいことといふのはそれ自体が個々の喜びになります。をいがけは、いつかいつか、それが喜び事というより、むしろ、つらいこと、もあつたりして、喜びに直結するものではありません。しかし、それによつて、他人には味

わえない本当の喜びを味わつてきたのが、昨年の姿であり、それが本当に大きな御守護だつたと思つたのです。

つい私たちは、「守護」といえば、身の上・事情がたすかった、良いことが起こつたといふことだと思つています。百万軒にをいがけをして、別席者ができたとか修養科生ができたといへば、

それは確かに御守護でしょうが、別席者も修養科生もできなかったといふところもあつたと思ひます。しかし、そういうことが現われてこなくても喜べたといふことは、正しくこれが他人の味わえない御守護の喜びではなかつたのかと、そして、これこそが、三年千日の本当の成人の姿だつたと、私は言えるのではないかと思ひます。

喜べる種は何もなかつたが、心に何かしら喜びがあつた。昨年はそういう一年だつたと思つ次第ですが、せつかくそういう喜びを与えていただいたので、すから、その喜びの境地は、やはりこれからも続けて味わうべくつとめる、それが成人に繋がることになるのではなかつたかと思ひます。

## „道の後継者の育成“

そして、より大きく成人しようと思つたら、同じことをしていただけない、一歩前進することが大切ではなかつたかと思つたのですが、昨年、真柱様から、その「宿題」——「末代の理」に繋がるようにつとめようといふ「宿題」を頂戴したわけですから、その上から、道の後継者の育成、といふことについて申します。

『稿本 天理教教祖伝逸話篇』一一七 父母に連れられて、

明治十五、六年頃のこと。梅谷四郎兵衛が、当時五、六才の梅次郎を連れて、お屋敷へ帰らせて頂いたところ、梅次郎は、赤衣を召された

教祖にお目にかかって、当時煙草屋の看板に描いていた姫達摩を思い出したものか、「達摩はん、達摩はん。」と言った。

それに恐縮した四郎兵衛は、次にお屋敷へ帰らせて頂く時、梅次郎を同伴しなかったという、教祖は、

「梅次郎さんは、どうしました。道切れるで。」と、仰せられた。

「このお言葉を頂いてから、梅次郎は、毎度、父母に連れられて、心楽しくお屋敷へ帰らせて頂いた、ごさうじ。

とあります。

道は一代で終わってはいけない、代々と引き継いでいくこの大切さを「ごさうじ」でお教えいただいております。

また同書「九〇 一代より二代」には、

明治十四年頃、山沢為造が、教祖のお側へ寄

せて頂いた時のお話には、『神様はなあ、『親にいなねんつけて、子を出て来るのを、神が待ち受けしる。』と、仰しつゝありますね。それより

一代より二代、二代より三代と理が深くなるね。理が深くなるって、末代の理になるのやで。

人々の心の理によって、一代の者もあれば二代三代の者もある。又、末代の者もある。理が続いて、悪いいなねんの者でも白いいなねんになるね。と、かようなお言葉がびりびり、お聞かせ下さいました。

と、正に、末代の理のごさうじお言葉でお論へくださ

れています。

また、『稿本 天理教教祖伝』第六章 ぢば定め」には、

教祖は、先ず自ら庭の中を歩まれ、足がびたりと地面にひっついて前へも横へも動かなくなつた地点に標を付けられた。然る後、こかん、仲田、松尾、辻ます、樺枝村の与助等の人々を、次々と、目隠しをして歩かされた処、皆、同じ処へ吸い寄せられるように立ち止った。辻ますは、初めの時は立ち止らなかつたが、子供のときぎくを背負つて歩くと、皆と同じ所で足が地面に吸い付いて動かなくなつた。

とありますが、辻とめぎくさんといえ

ば、教祖が直々に女鳴り物を教えられたほの方です。つまり、「親にいなねんつけて、子の出て来るのを、神が待ち受けてしる。」のごさうじお言葉を証明するようなお話が載っております。

### 代々続いてこそその信仰

私たちも、何らかの形でこの道に引き寄せられています。私をお引き寄せくださったのか、ひよつとしたら、私の後に繋がる者——子・孫・曾孫……を引寄せようとしておられるのかも知れません。と、私一代で信仰を終わらせては申し訳な



い。

もちろん、私自身のいなねんも切るために、引き寄せられたわけですが、但し、私だけをどうこうでは決まらぬということ、ここには、仰つてい

るのではないかと思ひます。

確かに、一人ひとり生まれ変わり出変わります。私も、今生、精一杯道の御用をし、神様に、少しでもお喜びいただきたらば、来世、また少しでもいなねんを切つていただいて生まれ替はることはできません。また、来世少しでも御用をして、一代通り切つて、また出直をして、また改めて生まれてきたときには、また少しでもいなねん切ることができませんが、ただそれは一人の理になってしまひます。

ところが、私の後を続けてくれる者ができる、二代の者ができる、またその後続いて次の代の者ができる……というふうには、代々続いてい

きな。白いいなねんに切り替はるるごさうじと云ふ。道を通つていける者の子供なり

孫なりが、代々と続いていくわけにございませぬ。白いいなねんに切り替はるる速度が速まるのや。

私は、この信仰をして五代目です。初代は一家離散でした。主人は事情から東京へ働きに出、子供は里子にあるいは養子に出すという形で、大教会創設の祖、佐吉・八重夫妻とともに笠岡でこの道を歩み

ました。女兒一人ですから、二代は養子取りでした。一生懸命通りましたが、女兒ばかり四人でしたので、三代目も養子でした。ところが、大きな御守護をいただき、今度は男児ばかり九人でしたが、一男は夭逝、長男は戦死、四代目は三男が継ぎました。五代目になってやっと長男の私が継ぐことができたというわけです。

もし、初代・二代・三代で道が切れていたらどうなっていたでしょう。確かに、その代ごとに身上・事情は御守護いただいたけれども、「代々と繋がっていく」ということがなかなか御守護いただきにくかった。それが、代々と道を繋げることによって、そういうことも御守護いただいた。

しかし、これは形に見えた御守護の姿で、最初に申したような、心の御守護(二)の三年干日を通して得た喜びの心(一)の上から申せばどうだったのかは、分かりませぬ。

私は、天理教で育ったからこの道を信仰しているわけではありませぬ。

皆さんに信仰の元一曰があるように、私自身にも信仰の元一曰があります。何でもどうでもこの道を通してもらおうと思った元一曰があります。それは、ある事情を契機として、いかなる中でも親神様を心に思索し、それを喜ぶことができるようにになったというわけです。

それまでの私が、素晴らしいことをしていたのでそういう心の入れ替えができたというのなら分かりますが、はつきり言いつて親不孝ばかりしていた私が、

どうして、そういう思いに切り替わることができたのでしょうか。それは、遅々たる歩みではあっても、初代・二代・三代・四代、そして五代と続いてきた代々の伏せ込みのお陰です。

## 本当のたすかり

そうやって、代を重ねることによって、心一つが喜びの心に切り替わってくる、これこそがいんねん納消の道であり、お道の本当の御守護の姿ではないでしょうか。

身上・事情がよくなることだけが御守護ではありません。それは、本当の御守護をいただくためのきっかけに過ぎませぬ。本当の御守護というものは、喜ばなかったものが喜びに切り替わるという姿ではないでしょうか。



これは、一代ではできません。二代・三代・四代……と代を重ねて末代の理にすることによって、全てが喜びに切り替わっていくという大きな御守護を頂戴できるのではないのでしょうか。それが、正しく陽気な心で世の中

「いんねんなら通りにならぬ。通って果たさならん。」といわれます。お道を通っていても、身上・事情が起ります。しかし、それを喜びに切り

替えられるようになる。それが本当のたすかりであり、そのたすかりを目指すためには、一代ではいけません。しっかりと代々続けることが大切な角目ではないでしょうか。

## 道を繋ぐ思いを持つこと

なお、「一代より二代、二代より三代」と仰っています。この信仰は、親から子・子から孫へが理想ですが、何らかの事情で「我が子へ」とはいかない場合もありますので、家族や親戚でなくても誰かに、自分の跡を受けて信仰してもらおう、これも代々の理です。自分の信仰を受け継いでくれる人ができたら二代目、その次ができたら三代目・四代目です。子供がいるには関係ありません。あとへ続けていくということが大切だということを改めてしっかりと思索していただいて、あとの代に繋がるように歩みたいと思います。

代々続けていく上で大切な角目を一つだけ申しますが、それは、「次の代に引き継いでいく思いをしつかり持つ」ということです。

自分が息を引き取る瞬間まで、「何とんでもこの信仰を続けてもらいたい」という思いを持ち続けることによって、神様がその心をちゃんと受け取られ、息を引き取ったあとでも、「あの人にはたすけていただいた。私も何とか続けさせてもらわなければ申し訳ない」といって、跡を受けてくれる人が必ずできてきます。

いくら言っても、自分の子がお道を信仰してくれないからと、途中で諦めてはいけません。心一つが我がの理ですから、こちらから切ってしまうたら、神様も働きようがありませんので、人がいくらいても、代々の理にはなりません。

とうとうと、「何でもござれでも、この信仰を伝えさせてもらうという思い」が大切な角目になってきますが、思いだけでは伝わりませんので、声にも出して、話しもしていかなければなりません。思いがなければ、それさえもできません。

そこで、先ず、その思いを持ち、そして、伝えていく努力をする。そのためには、少しでも自分の成人を高めていく必要も出てくる……とうとうと、成人がより深まり、自分自身も白いんねんに切り替

わっていくのです。

その思いを持つということとは、次の人に繋げるということだけではなく、自分自身の成人にも繋がっているということなのです。

## 教祖百二十年祭に向けて

この三年千日、御恩報じ…とうとうと、にをいがけに歩きましたが、これは横の広がり・横の繋がりで。末代の理…道の後継者の育成…というの、縦の繋がりがだろうと思います。紙でも布でも横糸だけではすべに破れてしまいます。縦糸がしっかりとかみ合うところに、突いても裂いても破れない大きな力になってくるわけです。

この三年千日、横糸をしっかりとしましたので、

今度は、百二十年祭という次の塚に向かつて、縦糸をしっかりとすることが大切です。記念祭を終えたあと、部内のあちこちでにわか後継者問題がでてきました。百二十年祭に向かつて仕切ったところに大きな成人の姿を見せていただくのではなからうかと思えます。

横糸としての…にをいがけ…

縦糸としての…道の後継者の育成…

これを二つの柱として、百二十年祭に向かつて成人の歩みを進めたいと思いますので、心を一つに合わせて共に歩ませていただけますようお願い申し上げます。

〈以上要約〉

# 談話



## 道の後継者育成に

### まつわる父の思い出

御野分教会長 佐藤 主計

今のこの旬に、父は個性の強い私をどのように育てたのだろうか、とときりに思う。

立派に育ったとは、どこから見ても思えない私ではあるが、曲りなりにも一教会長として通らせて頂いて三十余年、我が子と思うとき、それなりに育ったのだと思う。

幼い頃から、高慢の塊のような私だった。人から言われてするのは大嫌いだ。とうとう、言われたら絶対にしなかった。だからだろう。母はいつも「お前はあまのじゃくだ」と言っていた。

このような私を、道の後継者に、そして教会長の後継者に何とか育てて欲しいと願う両親の苦労は並

大抵のことではなかったらうと、今にして思えるのである。

父からは、母からは勿論のこと、それらしきことを言われた憶えはない。唯一つ、自分が若き日に肺結核を病み、医者から匙を投げられたところを、親の信仰とがばの理によって親神様からおたすけ頂いて道一条になった話は、小さい頃から幾度となへ、飽きるほど聞かされていた。唯それだけである。

そんな私だったから、私は親から言われる前にも、何事もしていった。十九歳で肺に身上戴いた時、席を運び、月次祭をとめることを心定めました、

後年、修養科に入ったのも、又教員を辞めて教会に帰ったのも、自から決めて実行していた。言われてするのがいやだったから。

教会に帰り、青年会の「用を共にさせて頂いていた或る時、福山分教会長の田中一之先生がこんなことを仰言ったことがある。

「主計には親神様が太い綱をつけたってだから、たとえ宇宙の果てまで行っても、「じつじつ」時、必ず引き戻して下さるから、心配はしてない」と父が話していたこと。そして本当にその通りになったことに感心したというお話でした。

教会長を私に譲った時もそうです。祭典終了後のあいさつで、「次を主計に譲りたいと思いますが、皆さんどうでしょうか。」と皆さんの同意を得、翌日、「わたしは高屋の人間だから高屋へ帰る。あとは皆さんと何事も相談して自分でやれ。」と言って、さつさと上級へ行ってしまった。

他にも父の思い出話はいろいろあるが、「じつじつ一連の父の態度から思えることが二つある。

その第一は、そう言えるだけの通り方というか、それだけの信仰信念をもつじつじつ。

その第二は、我が子、我が理の子を信ずるといつことである。

今自分を反省してみても、私にはこれだけのものがなく、父に申しわけないという思いにさいなまれる日々であり、そのようになりたいと努力を重ねている私である。

## 春の学生おぢばがえり

主 旨	道につながる学生が、一人でも多くの友とおぢばに帰り集い、真柱様のお言葉を心に治め、今後の成人を誓い合う。
テーマ	友とおぢばへ ー あふれる喜びを胸に ー
期 日	3月28日(木)
内 容	◆式 典 午前9時 本部中庭 「真柱様お言葉」
	◆直属アワー 午前11時
	◆別 席 正午より受付
	◆後夜祭『春まつり』 夕つとめ後 東西泉水プール前広場
参加対象	高校生、大学生、短大生、大学院生、専門学校生など
	* 教区ごとに団参計画を立てておりますので、詳細は、所属の教区・支部にお尋ねください。

## 少年会笠岡団 「おつとめまなび総会」

日 時	4月2日(火) 午前9時 受付、9時30分 開会 午後3時 終了予定
場 所	笠岡大教会
内 容	午前 おつとめまなび、式典 午後 こども運動会(小学生~中学生) スーパーボールすくい(幼児)
対 象	少年会員(めばえ~わかぎ) 育成会員(高校生、大学・短大生、大人)
服 装	「おつとめまなび」をつとめる人はハッピーに帯かバンド、白靴下 祭儀式をつとめる人はおつとめ衣



# 記念 長就任記 会

## 第84回総会

立教165年 **4月19日**

### 笠岡支部別席団参

#### 日 程

(いずれの便も大教会発着)

▲ 3月30日(土)~31日(日)

別席(31日 午前・午後)

▲ 4月7日(日) 日帰り

別席(7日 午後)

▲ 4月13日(土)~14日(日)

別席(14日 午前・午後)

▲ 4月17日(水)~19日(金)

教祖誕生祭参拝・婦人会総会・別席

▲ 4月25日(木)~26日(金)

月次祭参拝・別席(25日 午後)

#### 参加費

5,000円

(往復運賃のみ、宿泊・食費は別途)

式典  
記念行事

午前九時三十分  
本部中庭 南・東・西礼拝場前  
土持ちひのきしん 式典後引き続き

一 委員部一名以上の別席者を

婦人会別席月間 三月二十六日~四月二十六日  
委員部長てをどりまなび 十八日午後五時 南門周辺

## 春季大祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に会長上原理一慎しんで申し上げます  
親神様には人間をお創造はじめになられたその時より今日まで何一つ変らぬ一列子供かわいいの親心と果てしない自由の御守護のまに／＼日夜を分かつたずお見守り下さり陽気ぐらしへとお導き下さっております事は誠に勿体ない極みでございます 加えて心一つの理で生まれ替わり出替わりする間に親の心や働きを忘れこの世限りと我が身勝手に心を遣い争いに明け暮れ身上事情に苦しむ姿を哀れと思召されるや天保九年教祖を社としてこの世の表に現れ自由の御守護で以て人をお引き寄せになり万いさいの真実と陽気ぐらしへ向かうたすけ一条の道をお明かし下さいました

以来お引き寄せ頂いた私共は「世界一列助けたい」との親心に少しでもむくいたいと御恩報じを念じ日夜たすけ一条の上につとめ励ませて頂いておりますがその思いは一代に留まらず二代三代と代々受け継がれ今日の代までつとめさせて頂いて確実に白いんねんへとお導き下さっております事は誠に有難い極みでございます その喜びを胸にますます勇んで万たすけの道を歩ませて頂いておりますがその中にも今日の吉日は明治二十年教祖がろつくの地に踏みならしに出られた尊い日を記念してつとめる春の大祭として又本年最初の理のお許しを頂いてつとめる御祭日でございますので只今からおつとめ奉仕者一同喜び心も一汐に明るく陽気に勇んで座りつとめてをどりをつとめて春の大祭を執り行わせて頂きます

御前には折からの大寒の寒さの厳しき中も厭いませず今日の日を楽しみに寄り集い日頃の御高恩に改めて御礼申し上げる皆の状をご覧下さいまして親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

さて本年本部元旦祭に於いて真柱様は更なる実動に邁進する旨述べられ加えて年頭会議で教祖百二十年祭をつとめたいとの思いと成人へと育成する為に自分の役割を果たす事の大切さをお述べ下さいました それを受け笠岡では昨年の記念祭での真柱様のお言葉であります「御恩報じ」と「末代の理」を合わせ思索しよりその思いを強くした上で教祖百二十年祭目指し「にをいがけ」と「道の後継者育成」に主眼を置いて記念祭同様一手一つに心を合わせて実動にかからせて頂く所存でございます

何卒親神様には句々にお聞かせ頂く親の声をたよりに精一杯に歩む皆の誠真実の心をお受け取り下さいまして万たすけの上に尚も自由の御守護を賜わると共に今年一年にふさわしい成人の姿をお与え下さいますように一同と共に慎んでお願い申し上げます



教祖百十年祭以降、立教百六十年の節目の年に続き、教祖御誕生二百年の年には真柱継承奉告祭がつとめられ、続いて笠岡大教会創立百十年に向かう三年千日のお打ち出しを頂きまして、昨年暮れの記念祭までつとめて参りました。

更に本年年頭の御挨拶で四年後には教祖百二十年祭をつとめたいとの真柱様の親心をお聞かせ頂きまして、明年からその三年千日活動に掛かりますので、本年はその準備期間として、大教会長様より末代に続く道を目指して「後継者の育成」を念頭に置いてつとめるようにとお仕込みを頂いております。

「ホツとしたのも束の間」とは申しますが、何れの世界も高齢化が進んでおります。余りご無理はなさりませぬよう、くれぐれもご自愛の程をお祈り申し上げ、まだ若輩の我々は「小人閑居して不善を為す」と言われぬよう、身を引き締めて進りたいものです。